



TITLE:

コンタクト・ゾーンとしての占領  
期ニッポン：「基地の女たち」をめ  
ぐって

AUTHOR(S):

田中, 雅一

---

CITATION:

田中, 雅一. コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン：「基地の女  
たち」をめぐって. コンタクト・ゾーン 2011, 4: 163-189

ISSUE DATE:

2011-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177234>

RIGHT:

## コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン

——「基地の女たち」をめぐって

田中 雅一

強者としての外国人と、多かれ少なかれ屈辱的な立場にある日本人、それにその中間者としての存在（外国人相手の娼婦や通訳など）、この三者の相関をえがくことが、すべての作品においてくりかえされた主題でした。

（大江健三郎，短編小説集『見るまえに跳べ』新潮社，1958年，後記より）

### 1 はじめに

コンタクト・ゾーンという概念が，今日使われるような形で取りあげられたのは，マリー・ルイズ・プラット（Mary Louise Pratt）著『帝国のまなざし』<sup>インペリアル・アイズ</sup>（1992年刊行）においてであった。彼女は，ヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非ヨーロッパ諸国との「接触」を主たるコンタクト・ゾーンとして想定している。

プラットはつぎのようにコンタクト・ゾーンを定義する。

コンタクト・ゾーンとは，植民地における邂逅の空間である。それは地理的にも歴史的にも分離していた人びとが接触し，継続的な関係を確立する空間である。それは通常，強要，根本的な不平等，そして手に負えない葛藤を巻きこんでいる [Pratt 1992: 4]。

不均衡な状況下での相互交渉の一例としてプラットが注目するのは自己民族誌<sup>オートエスノグラフィー</sup>あるいは自己民族誌的表現という実践である [Pratt 1992: 7]。それは，旅行記など広義の民族誌の対象となる人びと自身による自己表象の試みである。人びとは征服者（ヨーロッパ人）の言語や表現を使って，自らを表象しようとする。それは，対抗的な表象でもある。プラットはこうした自己表象の試みを「トランスカルチュレイション」という言葉でも論じている。彼女によると，トランスカルチュレイションとは，従属的な立場にある非西欧人が，支配的な立場にある西欧人あるいは都市民によってかれらに伝えられるさまざまなモノから選び抜き，新しいなにかを創出していく過程を意味する [Pratt 1992: 188]。

『帝国のまなざし』が18世紀半ば以後の旅行記の吟味を通じて明らかにしたことは，コンタクト・ゾーンでは独自の歴史をもち，環境や社会についての知識をもつ人びとを，科学の名のもとに，資源利用の視点から，あるいは自然の強大なエネルギーの礼賛を通じて，

消し去ってしまうのか、ということである。と同時に、ヨーロッパ人のまなざしもまた多様であり——この多様性をプラットは時代の変化と書き手のジェンダーに求めているように思われる——、さらに現地からの対抗的なまなざしと実践が存在していたこともたしかであった。具体的にそれは自己表象（自己民族誌）の実践であり、ヨーロッパの影響下でのあらたな創造的文化実践といえるトランスカルチュレイションであった。

さて、問題は、プラットのコンタクト・ゾーンをめぐる議論には、大江健三郎の表現を借りれば「中間者」への視点が欠けているという点にあると思われる。自己民族誌やトランスカルチュレイションも、たんに「植民地化された主体」が行う実践だととらえるべきではないだろう。支配する側とされる側のあいだには無数の中間者や媒介者たちの実践が存在すると考えるべきではないだろうか。植民地主義の研究については、すでに「コラボレイター」（協力者）という概念を導入することで、こうした問題を克服する試みがなされている。コラボレイターとは、文化的・歴史的背景を考慮するなら支配されている側に属するが、植民地支配の維持に深く関与してきた「現地人」のことを意味する。たとえば日本の植民地下で日本に協力した朝鮮の人びと（対日協力者）などを想定してほしい。コンタクト・ゾーンをめぐる議論においてもこうした中間者の概念を導入する必要があるだろう。ただ、栗本英世〔1999:164〕が指摘しているように、ひとりの人間が、ときに協力者でありときに抵抗者であるというような状況を考慮すべきであろう。この点について、ひとつの極に植民地支配の権力者を、もうひとつの極に支配される従属者を置き、そのあいだにさまざまな矛盾を抱えた中間者を位置づける、というスペクトラムを想定すればいいのかもしれないが、私はむしろ、コンタクト・ゾーンにおいてはすべての存在が中間者となる、なり得る、それがコンタクト・ゾーンの特徴なのだ、と考えたい。

本稿では、プラットの問題意識を継承しつつ以上の問題を念頭に、占領期（1945-1952年）ニッポンにおける米兵相手の売春婦をめぐる言説について考察を行いたい<sup>1)</sup>。

## 2 占領期ニッポンにおける売春

アジアの弱小国だった日本は、植民地支配を受けることなく大国ロシアを打ち破り列強国の仲間入りをすることになった。しかし、その輝かしい帝国日本の唯一の、そして最初で最後の汚点が、太平洋戦争での敗北であり、その後の連合軍による占領である。これは、1951年9月サンフランシスコで開かれた対日講和会議で締結され、翌年4月に発効される平和条約によって終結するまで7年にわたって続いた。

なお、平和条約発効とともに、日米安全保障条約が発効し、そのまま米軍が駐留することになる（図1）。これによって、進駐軍あるいは占領軍から駐留軍へと名前が変更されることになった。本稿は、連合軍（実質米軍）の支配下にあった終戦後の日本社会をコンタクト・ゾーンと考えることにしたい。それは、きわめて集約的な形で、「権力の根本的な非対称的関係が存在するなかでの共在、相互作用、絡みあう理解や実践」〔Pratt 1992: 7〕が認められた時期であり、短期ではあったが、安保体制下、戦後の日本の、ポストコロニアルな政治・経済体制を決定する時代であった<sup>2)</sup>。

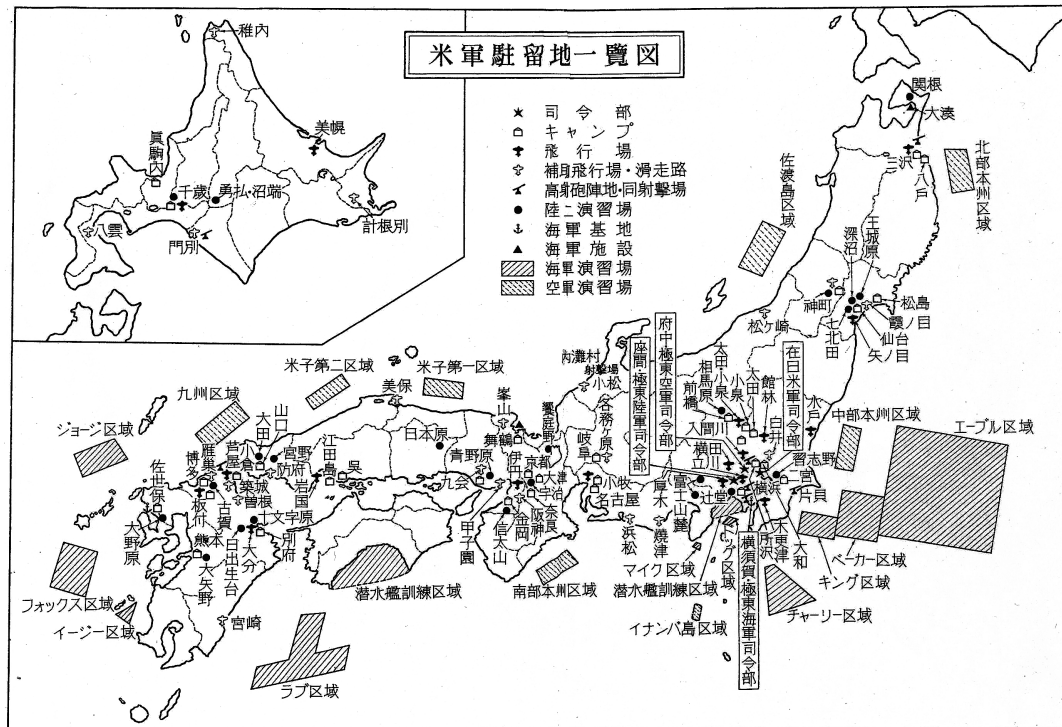


図1 米軍駐留地一覽図（『決定版・神崎レポート 売春』より）

昭和20年（1945年）8月15日、日本の敗戦が決まった直後に、米兵を中心とする連合軍を受け入れるための準備がはじまった。政府主導のもとで、8月18日に「秘密通達」がなされ、各地で進駐軍相手の売春施設「特殊慰安施設協会」（Recreation and Amusement Association, 以下 RAA）の設置準備がはじまり、「新日本女性」という名で若い女性を募集したことはよく知られている事実である〔原田 1994:155-156〕。これは、一般女性を米兵の性的暴力から守るために創案された制度であった。しかし、外国人相手を嫌う売春婦たちには不評で、一般女性を募ることになった。この女性たちが「女の特攻隊」〔神崎 1953:218; 平井 2007:81〕や「防波堤」と呼ばれ、「緩衝材」〔ダワー 2004:142〕となったのである。ただし、これで性的暴力がなくなったわけではない。<sup>3)</sup>

RAA は、性感染症が蔓延し、これから米兵を守るためという理由で（ただし、表向きは風紀上よろしくないという理由で）、翌年 3 月に廃止された。<sup>5)</sup> この結果、多くの女性が解雇された。なお、この 2 か月前の 1 月に公娼制度が「公娼制度廃止に関する覚書」という通達をきっかけに廃止されるが、当時の売春街は、多くが赤線地帯となってそのまま存続が許されることになった。だが、赤線地帯に米兵たちが足を踏み入れることはきびしく禁じられていて、取り締まりも厳重であった〔原田 1994:185-186〕。このため、米兵を相手にする女性の多くが基地周辺で街娼になった。

売春婦の数は、駐留する外国兵の数によって大きく変化する。とくに朝鮮戦争が勃発すると、千歳や佐世保に大部隊が移動し、女性たちの数も増えた。千歳の変貌は終戦直後ではなく、1951年 4 月に朝鮮半島からオクラホマ州兵士団が引き揚げて来てからということになる。兵士の数はおよそ 3 倍の 5,800 人に膨れ上がっている。<sup>6)</sup> ピアホールは 11 軒から

58軒に増えた。ピーク時に1,000人くらいの売春婦が千歳で活動していたといわれる。

横須賀では取り締まりが強化される直前の1951年10月には4,000～5,000人の売春婦が存在したと報告されている〔慶応大学社会事業研究会編 1953:15〕。立川については1950～1952年にかけておよそ5,000人であった〔西田 1953:93〕。

佐世保についても朝鮮戦争時の1951年がピークで、この町の資生堂の化粧品売り上げが日本最高であったという記録がある<sup>7)</sup>。また、ベッドなどの家具が飛ぶように売れ、銀行は預金超過となった。

参考までに RAA の料金をあげておく。短時間で過ごす料金は15円（1ドル）、泊まりはこの2、3倍であった〔ダワー 2004:146；平井 2007:80〕。街娼に関していうと、1946年のはじめの立川では、月の稼ぎは42,000円から90,000円になった〔西田 1953:26〕。数時間のショートで1,000円、泊まりのオールナイトで2,000円である〔鈴木編 1956:67〕。1950年の横浜での調査では月に15,000円から30,000円を稼いでいる。ショートで500円から1,000円、オールナイトで1,000円から15,000円とかなり幅がある〔慶応大学社会事業研究会編 1953:22〕。また、1949年の京都では月平均14,570円〔大塚 1949:92〕、東京では26,700円から40,000円だったという指摘もある。これは、赤線地帯の売春婦よりはるかに高い額であった。日本人男性相手のみの街娼でも同じく20,000円以上もうけていた。女性の事務職は当時月額給料は平均2,237円だった〔Sanders 2005:85<sup>8)</sup>〕。米兵相手の売春婦はお金だけでなく、さまざまな品物を受け取っていたことも忘れてはなるまい。

日本に進駐していた連合軍は、進駐直後は米兵が40万人、オーストラリア兵ら英連邦軍が4万人などからなっていたが、朝鮮戦争勃発前には半分以下の12万5千人に減っていた。これら外国兵を相手にする日本人売春婦はおよそ最大時5万人にのぼった〔神崎 1953:229〕。彼女たちは、一般にパンパンと呼ばれた<sup>9)</sup>（図2）。もともと売る相手によって洋パン（洋娼）と和パン（和娼）という区別がなされていたようだが、すぐにパンパンは洋パンを意味することになる。ここでは、パンパンを外国人兵、とくに米兵相手の売春婦として使うことにする。パンパンは白人相手か黒人相手かによってグループ化されていたようである<sup>10)</sup>。

パンパンは街娼のバタフライとオンリー（あるいはオンリー・ワン）のふたつに大きく分かれる。バタフライは、文字通り街路で米兵と交渉し、ホテルやどちらかの部屋に行ってセックスをする場合である。かれらの交渉は、通常一回限りの短期間の関係である。これにたいし、オンリーは、すくなくともひとりに限って関係をもつ場合である。とはいえ、女性を長期間囲えるのは将校クラスであろう。将校とオンリーとの関係について、当時の将校で『オンリー・アキコ』（1958年刊行）の著者、ダンカン・ソープは以下のように述べている。

将校専用の有楽ホテルをあてがわれて最初にわかったことは、ほとんどの軍人がオンリーを持っていること。将校たちの集まるクラブにも、大っぴらでオンリーさんを腕にブラさげて来るのがならわしとなっていた。その女たちが欲しがるものは“物資”。タバコ、ウイスキー、軍服の生地、クツ下などの代償として、彼女らはいとも簡単に



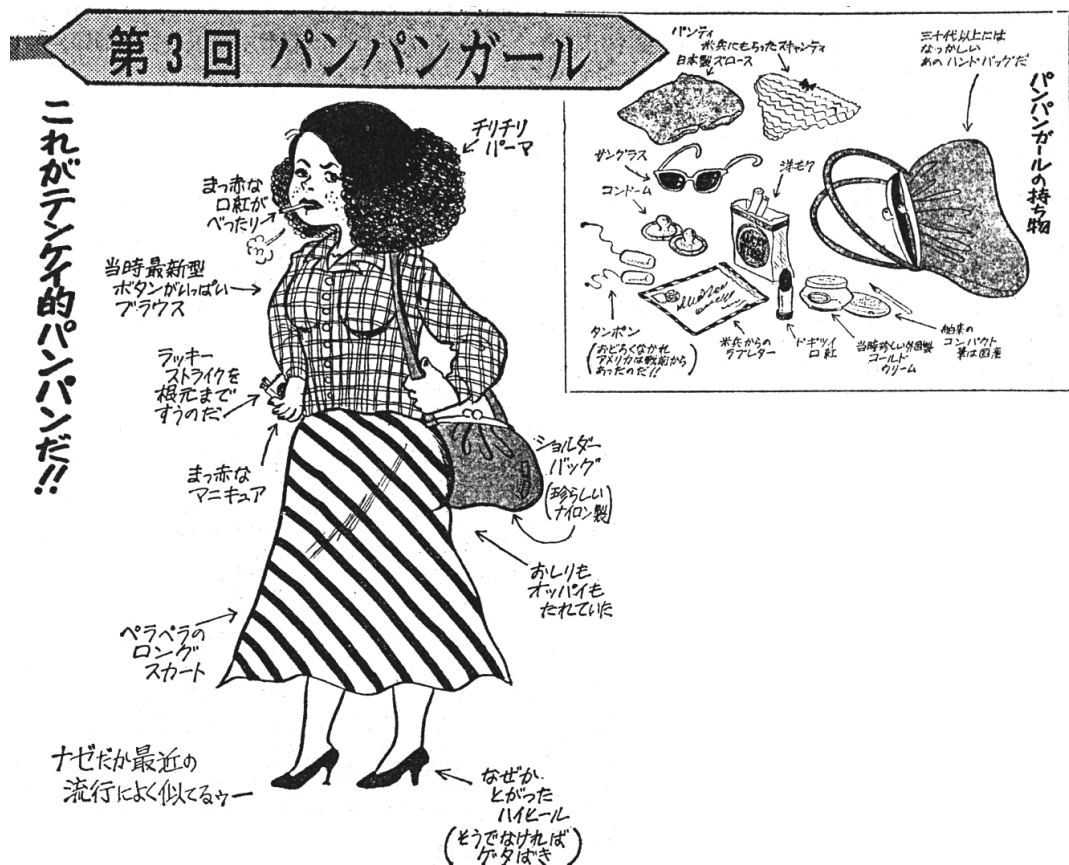


図2 パンパン (『週刊ポスト』1973年9月14日号, 78頁より)

オンリーになった。GI たちの求めるものは、むろんセックスだ。彼らとしては暴力をふるうことなく、彼女らとしても街角に立つことなく、そのお互いの欲求を満たすことができるすばらしい方法が“オンリー”という形なのであった〔週刊新潮編集部 1983: 323〕(初出「『オンリー・アキコ』」を書いた海軍大佐『週刊新潮』1969年2月1日号)。

以下で紹介する記事やルポにはさらに詳しいパンパンの分類なども出てくるが、重要なのは街娼とオンリーの区別だと考えていいだろう。

あるパンパンは、日本人しか相手にしなかったとはいえ、1946年ころの話として次のような印象深い言葉を残している。

遊郭にいたころは、自分のからだのことを考えて、一日に四、五人の客しかとらないようにしていました。それにくらべると、パン助は主人に搾取される心配がなく、みんな自分の収入になるので、つい欲が出てはたらきすぎるという結果になります。たまにお茶をひいたときでも、遊郭だと、いちいち主人のまえに手をつけて、「どうもすみませんでした」とあやまらなくてはなりません。あのいやな気持ちを思い出すと、だれに頭をさげる必要もないパン助は、ほんとうに自由なからだになったと思いまし

た〔神崎 1974:120<sup>11)</sup>〕。

彼女たちは、売春に携わっていたが、これまでの公娼——「かごの鳥」〔神崎 1974:119〕——と異なり多額の借金に縛られていなかった。

戦争に負け、経済的な貧窮や政治的な混乱がなければ、パンパンになる女性はほとんどいなかったであろう。そういう意味で、敗戦が、彼女たちを売春に追いやったといえる。そして、従来売春の経験がなかった中産階級の女性たちも売春の世界に入ってきたのである。彼女たちは、すでに消費文化に慣れ親しんでいて、米兵相手にセックスだけでなく、交際——映画やダンス——を通じて、米兵を楽しませることができた〔西田 1953:46-48; Sanders 2005:90〕。また、昭和20年代に書かれた多くの書物が、パンパンとなった動機が貧困とはいえない、と伝えている〔神崎 1953:225-226〕。ただし、西田による立川での観察によると、こうした自立志向の女性が増えてきたのは1948年以後だと指摘して、つぎのように述べている。

立川に蟄居していた特殊女性の性格が、そろそろ変わりはじめたのは昭和23年頃である。ただ金を得るために中流相手の売春をする、というだけでなく享樂的雰囲気彼女たちの間に濃厚となって来た。生きて行くために、自分の肉体を切り売りする、という悲惨な暗さが影をひそめて、靡頹的華やかさが彼女たちの生活を彩りはじめた。これは、この時代から、特殊女性の本質が、酌婦的なものから不良少女的なものへと変化を示しはじめたからである。生活難は減少して、家出娘とか、不良な交際の結果墮落した（中略）娘たちが、街の彼女たちの仲間となって多く入り込んで来たことが原因している。この娘たちは、やけが半分、性に対する興味が半分といった心理状態で、パンパン生活の中に踏み込んで来たのである〔西田 1953:66〕。

パンパンたちには、米兵とのつきあいの影響もあって敗戦後の混乱から生まれた解放感や米国由来の消費文化、女性の自立、肉体の肯定的主張などのイメージが認められるが、過度の理想化は避けるべきであろう<sup>12)</sup>。

さて、コンタクト・ゾーンにおける売春婦について語る場合、注意しなければならないのは、彼女たちについての語りが、二重も三重にも周縁化されていることである。すなわち、本稿の事例では、当時日本を占領し、圧倒的な力を有していた米兵たちとの関係で、また日本人男性との関係で、周縁化されていた。さらに、一般の女性や子供たち（！）からも周縁化されていた。この点を念頭に置きながら彼女たちをめぐる日本語の言説を吟味したい。

### 3 日本人男性の視点——「黄色い便器」

まず、終戦直後の米兵と日本人女性との関係について記載している高見順の『敗戦日記』を紹介しておきたい。1945年10月18日にはつぎのように書かれている。

日本人は、——年若い娘の多いのが目を惹いた。濠端でアメリカ兵を囲んだり、アメリカ兵に囲まれたり、——さらに、アメリカ兵にいかにも声を掛けられてそうな、物欲しそうな様子で、でもまだ一人歩きの勇氣はなく、二人三人と連れ立って、アメリカ兵のいる前を選んで、歩いている娘たち。いずれも二十前の、事務員らしい服装だ。いやな気がした。嫉妬か。二十を越した、つまり一応分別のあるといった女はさすがにいない。「——戦争中は、軍を利用したり笠に着たりしていた連中が、今度はまた真先にマッカーサー司令部（中略）、それがつまり同じ人間なのだから面白いですね」そんな話を私たちはしていたが、そう言えば、この浅墓な浅間しい娘たちもそのたぐいだなと私は思った。このにがにがしい娘たちと、そういう人間とは、同種類なのだと考えた方がほんとうだろう [高見 2005:376]。

これは、売春ではなく、どちらかという上層階級の女性と米兵との関係について日本人男性が抱いていた感情を表しているといえよう。しかし、高見は階級——すなわち彼女たちの親たち——にたいしてではなく、若い女性たちに非難の眼を向けていることに注意したい。

10月20日については以下のような文章が認められる。

アメリカ兵は自分の横を指差して、女の駅員に、ここへ来いと言っている。そして何か身振りをして見せる。周囲の日本人はゲラゲラ笑い、二人の女の駅員は、あら、いやだと言ったあんばいに、二人で抱きついて、嬌態を示す。彼女等は、そうしてからかわれるのがうれしくてたまらない風であった。別の女の駅員が近づいて来た。からかわれたいという気持を全身に出した、その様子であった。なんともいえない恥かしい風景だった。この浅間しい女どもが選挙権を持つのかとおもうと慄然とした。面白がって見ている男どもも、——南洋の無智な土着民以下の低さだ [2005:382-383]。

11月24日になってはじめてパンパンへの言及が見られる。

昨日、横浜駅で見たのですが、一見して女郎とわかる女が、チュウインガムをさも得意気にかみながら、人のいっぱいいる歩廊を傍若無人に、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしていました。アメリカ兵にもてて得意な気持なのでしょう。恥を失った者の姿というのを、はっきり見るおもいでした。女として一番大切なものを失うということは、ただにそれだけの問題でなく、人間として駄目になることだということが、はっきりわかりました。恐ろしいことです。哀れなことです [2005:438-439]。

高見は、他方で敗戦国日本の売春問題を、戦地に日本軍が連れて行った慰安婦と比較し、批判的にその制度を見る視点を示しているが（11月14日 [2005:427]<sup>13)</sup>）、具体的に目する女性については、日本人男性としての「嫉妬」や「侮蔑」があからさまに出ていることがわかる。



つぎに、当時すでに著名なルポライターとして知られていた神崎清の「黄色い便器——米軍の排泄都市タチカワ」（『真相』1954年復刊3号、後に神崎〔1974:196-202〕に再録）という記事を検討することで、男性がパンパンについてどう見ていたのかを検討したい。それはつぎのような文章ではじまっている。

いまアメリカの兵隊のあいだで、『黄色い便器』（イエロー・ストゥール）という奇妙な言葉がはやっている。米語辞典の最新版にはまだのっていないがパンパンの異名である。（中略）女の方では爪をあかくそめたり、安物のイヤリングをつけたりして、淑女のつもりでいるのだろうが、兵隊仲間では、「足の短い便器をひきずってあるく」といっておもしろがっている。ああ、ハイヒールをはいた便器！チュウインガムをかむ黄色い便器！腰をふってジルバをおどっている足の短い便器！アメリカの兵隊にとって、日本の女は、生理的必要をみたすためのたんなる道具にすぎない〔神崎 1974:196-197〕。

オンリーもまた「黄色い便器」の変異でしかない。

しかし、アメリカの兵隊のすべてが、商売女と浮気していると思いきむほど、こっけいなことはない。誰が排泄したかも知れぬ不潔な「共同の便器」をきらう兵隊はいわゆるオンリーをかこって、「専用の便器」を用意するのである〔神崎 1974:200〕。

著者の神崎に従えば、こうした侮蔑的な描写は米兵の語りに基づいている。そのこと自体誤りとはいえないであろう。しかし、神崎の意図がどうであれ、「国際売春都市タチカワ」あるいは「ハイセツ都市」で働く女性たちは、「黄色い便器」、「足の短い便器」、「共同の便器」、「専用の便器」と形容され、他方米兵はキャバレーなどの「排泄機関、すなわち売春施設」で働く女性相手に「タチカワで排泄」する存在である。こうした記述で強調しておきたいのは、売春婦を便器とし、売春婦相手の性交を排泄とする図式がたとえ神崎自身の考えではないとしても、読者は、こうした図式に反発するというより、受け入れ、類似の言葉で女性たちを形容してしまう、という遂行的（パフォーマティヴ）な役割を本記事が果たしているということである。これらの表現は、すでに流布している表現をそのまま使用しているだけだとしても、それ自体力をもって、われわれに女性についての一方的な見方を押しつけている、ということを忘れるべきではない。読者は、そのような表現に賛意を示すかどうかは別にして、女性たちを「黄色い便器」として見たり、接したりすることになろう。神崎が使用する表現はあまりに汚く、女性への態度がきわめて侮蔑的に見える。

なお、神崎には『夜の基地』（1953年刊行）という、基地の街の売春や闇市の実態を暴いたルポルタージュがあり、その一部は『売春——決定版・神崎レポート』（1974年刊行）に再録されているが、そこでも「人造バターよりもくさい洋娼がはびこり」〔1974:69〕「くさりかけたミカンのように病的な感じ」〔1974:70〕といった言葉でパンパンが形容さ

れている。

神崎は、日本人として、日本人の視点からパンパンを描き、その実態を告発することで、米兵たちの悪行を非難している。しかし、かれのまなざしにさらされている女性たちは、そのみじめさを強調するあまり、米兵たちが見ていた（とされる）視点にかぎりなく重なっていくことになる。その結果、かれの書いたものは、米兵たちによる一面的な（これも神崎の夢想ともいえないことはないであろうが）描写を再生産することにとどまっている。ただ、私には、神崎による女性像は案外当時の男性たちが抱いていた基地の女性像に共通の見方だったのかもしれないと思われる。神崎は、1973年のインタビューで以下のように答えているからである。

食うや食わずの毎日を送っていたので、権力や金力にへばりつく彼女たちの生態には、やはり、しゃくにさわる感情のほうが強かった（「アメリカ型性行動の伝達者たちの実態 第3回パンパンガール」『週刊ポスト』1973年9月14日号）。

高見の日記が終戦直後の記述で、かつ、より個人的な感情の吐露といえる性格のものであるのたいし、神崎の文章はすでにパンパンが社会問題化していることを前提としたものであることに注意しておきたい。

#### 4 子供たちの視点

つぎに基地の町で育った子供たちの意見を紹介しておこう。

1953年に出版された『基地の子——この事実をどう考えたらよいか』は、基地周辺に住む小中学生たちが経験したことがらを綴った175点の作文や詩からなる。これは、1952年10月に全国募集して集まった73校の小中学生の作文1,325点のうち選ばれた200点の一部である。そのうちパンパンや赤線を主題にしているのは30点、それ以外にもパンパンに触れているものが34点ある。つまりの文章のうち3分の1強がパンパンについて書いていることになる。子供たちにとって、パンパンの存在がかなり大きな比重を占めているといえよう。想像通り、子供たちのパンパンについてのイメージは良くない。「外人がいる町」（佐世保の小学校6年生、女性）という作文では、「夜の町をあるいていると、外人と、夜の女とが手をつなぎ、つめは赤くそめ、子供がきるような赤いふくをきて、下品なすがたをしていながらも、いばって歩いています。このようすをみていると、ほんとに、にくらしくなります」[清水ほか編 1953：44]という文章が認められるが、この作文の主題は、おもちゃ屋で後から入ってきた米兵の家族が優先されて、店主に差別されたと感じたことである。

「パンパンと兵隊の都市」というセクションには、「パンパンとへいたい」と題する小学校1年生の目撃談（「ぱんぱんとへいたいと、もんだ。ぱんぱんと、きすした。ぱんぱんとへいたいと、だんすをした。ぱんぱんが、はだかになりました。（以下省略）」[清水ほか編 1953：155] から、部屋をパンパンに貸していて勉強に集中できない小学生の悩み、

仕事をしないでお金を稼いでいるかに見えるパンパンへの怒り、自分の町をパンパン町と呼ばれることの悔しさ、幼い妹がパンパン遊びをしはじめた時の困惑、さらにはパンパンの子供自身の悩みなどさまざまな感情が認められる。

つぎに紹介する『基地日本』は『基地の子』と同じ年に出版された書物で、どちらの本にも清水幾太郎が編者として関わっている。こちらは、日本各地（千歳から大分まで）の基地の町18カ所についてのレポート集である。この書物の特徴は、基地が子供たちに与える影響や、子供たち自身の意見を主題としているところにある。

パンパンにたいする子供たちの意見は、大方否定的である。それは夜うるさいとか、人前で抱擁をしたり、言葉使いが粗野であるなど、恥ずかしいというものである。また、売春宿の乱立によって、実際の性行為を見たりコンドームなどに触れたりすることも増えている。そして、隠語を使ったり、パンパンと米兵との痴態のまねごと（パンパンごっこ）をしたりすることなどが、教師や親を悩ませている。

こうした状況は、立川などの都心部だけではなく、山中湖周辺の村（人口約3,700人）や山形県の農村（人口約4,500人）などの農村部でも見られた。農村地帯のほうが、影響は深刻であっただろう。突然米軍が進駐し、基地を整備し、そしてパンパンがやってくるわけである。飲食店やホテルがあるわけでもない。昼間から米兵とパンパンとの痴態を見せられ、それが夜中まで続く。しかし、彼女たちが払う家賃は馬鹿にならない金であった。一部屋貸すだけでも収入は安定する。村人たちは、嫌がってはいてもパンパンや米兵たちへの依存を強めていく。現在の基地の町や沖縄の状況の縮図がすでにできあがっていたことが手に取るようにわかる。

いくつか引用しておこう。どちらも佐世保の小学生の言葉である。

K（男）アメリカ人と日本の女が一緒に肩組んで歩いているのは良くないと思います。それは、子供のためにも良くないし、身の廻りをきれいに飾り着けているのを普通の人が見ても、大抵いやらしく思うでしょう。が、あまりしっかりしていない人は自分もあんな綺麗な着物をきたり、つけたりしてみたいと思って、知らず知らずの内に、悪くなっていくのではないかと思います。それを失くすには駐留軍を失くす事です。

Y（女）「夜の女」は外人といっしょに街の歩道などを歩いていますが、あれは外人からお金をせびり取るためでしょう。そんな人を見れば「ああ日本にもこんな人がまだいるのか」と情なく思います。

他方、横須賀市の教育研究所が行った調査では、羨望に似た思いも認められる〔慶応大学社会事業研究会編 1953:27〕。

パンパンはいいかっこうをしているから、いいと思います。そしてあめりかさんにおかねや、あめりかのちょこれーとをもらって、わたしもなりたと思います（小学校2年生、女性）。

アメリカ人とパンパンと英語を話していた。私は英語が話せていいなあと思った（中学校2年生、女性）。

ここには経済的な豊かさや英語に代表される欧米文化へのあこがれが認められ、報告書はそのような思いをもつ子供たちが実に多いと述べている。

## 5 米軍批判とエロティシズム——『日本の貞操』

本章で検討したいのは、『日本の貞操——外国兵に犯された女性たちの手記』と『続日本の貞操』という書物である。両者はともに1953年に公刊された書物で、ベストセラーになる。前者は4名の女性たちの独白からなり、当時通訳をしていた水野浩が編集している。後者は、後に『ノストラダムスの大予言』（1973年刊行）を著した五島勉の編集で、1985年に『黒い春——米軍・パンパン・女たちの戦後』と改題されて出版されている。こちらは女性たちの証言とその背景の説明からなるルポルタージュである。なお、『日本の貞操』は男性（当時共産党員）の創作であった、ということが最近、関係者の証言に基づいて指摘されているが[モラスキー 2006:238]、当時の日本人読者は女性の手記として読んだことを考慮して、分析を進めたい。

両者に共通するのは、米兵による性暴力に対する怒りである。『日本の貞操』の冒頭で紹介されている小野年子、23歳の手記は、本書のおよそ半分を占めている。以下、簡単に紹介しよう。

年子は、京都で米兵たちにだまされて外に連れ出され、輪姦される。東京でダンサーになるが、ダンスホールでも暴行を受け、売春をはじめる。一時オンリーになり、裕福な暮らしも経験し、自分の愛人とその仲間たちが素人の女性をだまして輪姦するというゲーム（狩り、ハンティング）を手伝いさえする。あるとき、闇市に買い出しに来ていた女性を最寄りの駅まで送っていこうとジープに乗せ、仲間のひとりの家に連れこむ。女性は年子がジープに乗っていたので安心して乗りこむ。

待ちかねていたヘイズとミラーは、獲物のすばらしさに声をあげて喜んだ。こわさに口もきけない女の子をロジャースと3人がかりでうちに抱えこんだ。私はそれを当然のようにみていた。もし私がかつて強姦された当時の苦しみを少しでもおもいかえしたなら、こんな手助けはできるはずがなかったのだ。それなのに私はそのうえ直接、手伝いさえしてしまった。（中略）さすがの私も私のあさましさを、首をふって忘れようとした。私はそれほど盲目のけだものになっていたのだ。だからこそ私はこのように一切合切を告白する。ロジャースは、（女性に）頼ずりし、それから体をずらした。ハンティングで、こんなに私まで興奮した気分にあきこまれていったのは初めてだった。ビールでのどをしめすのも忘れて、皆息をつめて、見守っていた[水野編 1953: 86-87]。

ロジャースは小野年子の愛人である。自分の愛人が女性を犯すところを見ながら年子も興奮している。しかし、このハンティングは年子のその後の人生を大きく変えてしまう。女性とは別れ際にキスをしようとしたロジャースの舌を噛みきって殺し、自分の舌も噛んで自殺してしまうからだ。年子はロジャースとそれまで住んでいた家を追い出され、ふたたび街娼となった。そして、梅毒や癌に体を蝕まれていく。彼女の手記には、米兵への憎しみ——かれらによる強姦さえなければ売春などしていなかった——と、彼女自身の一種のあきらめや弱さ、そして、ときに米兵といることの喜びが混在している。

小野年子の手記にはさまざまなエピソードが語られている。友人の米兵が飼っていた猿欲しさに、自分の女性（オンリー）を猿の飼い主に引き渡す米兵。もちろん当の女性は猿と交換に捨てられたとはつゆ知らず、もと飼い主の男が来るたびに形だけの抵抗をするが、結局は抱かれてしまう。

この米兵は、街で拾ってきた靴磨きの少年を基地で雇っているが、かれの楽しみのひとつは猿に追い回させることである。あるとき少年が猿に刃向かうと、米兵は怒ってかれを追いついてしまう。しかし、少年は出ていくと見せかけてオフィスに戻ってきてこの猿を撲殺する。これを知った米兵が少年を殺そうと追いかけるが、少年は逃げる途中で自動車にひかれて死んでしまう。

年子はまた、米兵たちには街娼やオンリーだけが性的対象ではなく、基地で働いている女性を犯すために存在すると思われていると指摘する。そんな女性が、ほかの米兵にやられる前にやる、というのが米兵たちの論理だというのである。

ときに、年子はなわばりを荒らす女性をリンチするが、年子自身も銀座に買い物に出て、リンチを受ける。さらに衝撃的なのは、米兵の飼っていた犬に年子が犯され、それが米兵たちの見せ物になる、というエピソードが紹介されていることである。

私は情けなかった。が、それまでいいだしたら人のことなんか、平気で無視する G. I. 相手では、されるままになる以外にない。私はかたく目をつむってこらえた。私はただ、涙の落ちるのを一心にこらえていたことをおぼえている [水野編 1953：132]。

ショーは何度か行われた。ある日年子は、この犬を連れだし、殺してしまう。

私は、惨めな自分の生涯の、このもっともくやしい経験を、すっかり泥を吐くように吐きだした。何のために——しかしわたしはいくぶんでも私を通じて G. I. たちの真の姿をつたえたと思う。彼らのみにくい動物性を示したはずです [水野編 1953：137]。

年子だけではない。職場や自宅での強姦によって、運命を大きく変えざるをえなかった女性たちの証言が続く。朋江は、一家団欒の最中に米兵ふたりの侵入を受け、母と妹とともに強姦された。妹は惨殺されるが、警察はなにも動こうとしない。そして朋江の妊娠がわかる。



私は戦争が終り、平和が回復してから、二年もあとに、アメリカの自由の使徒たちから受けたきずを、口にすることさえ許されてはいない。また、口にすることもできない立場におかれている私達は、アメリカのいつはてるともしれない占領が私達におわせた深傷を胸に死ぬまでひめて、苦しみ、もだえながら、生きていくほかはないのだ（強調点はオリジナル）[水野編 1953：223]。

『続 日本の貞操』では女性たちの証言はより短いものになっているが、論調は同じようなものだ。平凡な、しかし幸せな日常、偶然、あるいは仕組まれた米兵たちとの邂逅、そこでの暴力による処女喪失、混乱とあきらめ、家族との葛藤、家出、売春というテーマがなんども繰り返される。彼女たちの手記を貫いているのは、現在の状況を招いた米兵への怒りや憎しみであり、また圧倒的な力に対する無力さとあきらめである。

以下4点について指摘しておきたい。

まず、女性たちは米兵に恨みをもち、自分たちの境遇を嘆いていたとはいっても、ときに彼女たちは女性同士の配慮に感謝し、また米兵とのデートに心を弾ませ、さらに朝鮮戦争で疲弊した若い兵士に同情する。そして、彼女たちだけでなく、米兵の人生をも踏みにじっていく大きな暴力の存在に不安になる。

つぎに、戦後の混乱期、日本人男性による強姦がなかったとは思えないし、日本人相手の売春婦もいただろう。そして、彼女たちも売春をはじめた理由は生活苦や処女喪失が契機だったかもしれない。しかし、こうした女性たちが語られることはなかった。彼女たちは「日本の貞操」を代表することはなかった。米兵の異人性が女性の「特殊性」を強めているといえる。そこには、後で触れる読者の性的好奇心に訴える要素が認められるともいえる。

第3に、こうした手記は、もちろん同情をもって読まれ、また米兵の犯罪を告発することに役立ただろう。本書で強調されているのは、米兵たちの犯罪についての告発である。そこには、外からの記述ではうかがい知れない女性たちの心情が吐露されている。しかし、同時にこうした手記が性に関する露骨な読み物として消費されていたことも想像に難くない。当時のカストリ雑誌<sup>14)</sup>に見られるエログロの世界と共通の語りが認められる。ここにはドラッグこそ出てこないが、ダンス・パーティーのあとの乱交、獣姦、サディズムや屍姦などは、村上龍著『限りなく透明に近いブルー』（1976年刊行）を想起させる雰囲気<sup>15)</sup>が認められる。以上の特徴は、すでに指摘したように、『日本の貞操』が男性によって書かれたということを考慮すれば説明がつく。これに関して、京都社会福祉研究所の報告書〔竹中・住谷編 1949〕に収められている一字一句修正していない16名の女性たちの手記や137人の口述書、あるいは創価学会婦人平和委員会が集めた神奈川の女性たちの手記〔1982〕に比べると、『日本の貞操』の性的描写の特異性が明らかになる<sup>16)</sup>。

最後に興味深いのは、当時の文章が米兵の「人種」にほとんど言及していないということである<sup>17)</sup>。

## 6 救済者としての男性 犠牲者としての女性

本章では西田稔の『基地の女——特殊女性の実態』（河出書房，1953年刊行）を取りあげる。これは251ページ，20章からなる書物である。西田は，戦前から児童教育に関わってきたが，戦後立川に住み，米兵による基地の町に住む子供たちへの影響や，米兵とパンパンのあいだにできた子供たちの問題に関心を寄せ，米兵相手の女性たちの実態に注目した。米兵と関係をもつことで生活の糧を求めた女性は，立川には昭和25年（1950年）から27年（1952年）前期までの最盛期において5,000人いたといわれている<sup>18)</sup>。

本書は，結論からいうと，きわめて良質な民族誌である。歴史的かつ広範囲の数量的な資料とともに，具体的な事例も多く含まれていて，基地周辺の女性と米兵との関係，女性の生活実態に鋭く迫っているからである。とくに，米兵相手に売春をする女性たちの生々しい事例は，同年，同出版社から発表された，たぶんもっと有名な神崎清の『夜の基地』にはほとんどない視点である。しかし，女性たちを特定の形容によって規格化しようとする傾向が強いのも事実である。この点を考慮しながらテキストを吟味していきたい。

西田は，本書の冒頭で調査を開始した当初（1947年末）は，「パンパン」と呼ばれる夜の女性たち，すなわち「特殊女性」たちと米兵が繰り広げる痴態から一般市民，とくに児童を守りたいという気持ちが強かったと述べている。しかし，それから5年以上経ったいま（1952年）では，女性を排除するだけではなく，女性もまた「汚濁の闇」から救出し，更正させなければならない，と決意している。

まず評価すべき箇所をいくつかあげたい。ひとつは，調査から執筆までの期間におよそ2,000人の女性にインタビューをしている事実である。そのなかには，全員ではないが，質問表によるアンケートも含まれている。1,905名の回答に基づき11の動機を羅列している。それらは，1）もともと性産業で働いていたり，妾だった女性が転業（19パーセント），2）基地勤務で米兵と恋愛したが，その後失恋（16パーセント），3）虚栄心を満たすため（14パーセント），4）金に不自由しない生活にあこがれて（11パーセント），5）友だちに誘われて（9パーセント）が上位を占め，6）家庭貧困（8パーセント），7）不良な交際で身を落とす（7パーセント），8）両親らの養育費（6パーセント），9）家庭不和による家出（5パーセント），10）家庭が許さない恋愛，結婚に失敗（3パーセント），11）貯蓄のため（2パーセント）である。これらの動機は，西田も認めているように，基地で勤務したり妾になったりした理由には家庭の不和や貧困があり，また友だちの誘いの背後には家庭の不和があることなども想定され，かならずしも相互に排他的とはいえない。

本書では立川という町が戦後どのような経済状況に置かれていたのかがきわめて明晰に説明されている。基地の存在，そこから流れ出る軍事物資などの闇物資，それを米兵から購入する闇商人，「第三人」と一部の女性たちの関係がまず詳述されている。そして，立川を基地に依存している植民地的な都市と形容している。その上で，女性たちを一括りにしないで，7つのタイプに分けている。それらは，街娼，自称オンリー，オンリー，恋

愛関係というより金目当てのオンリー、人妻、一般家庭の娘、ほかの街からの通勤女性である。また、女性たちの、売春をはじめた動機、組織や売春制度についても具体的に論じている。さらに、世代（酌婦と不良少女）やタイプの相違（街娼とオンリー）に由来する女性たちの対立などにも触れていてきわめて動態的な記述にあふれている。

著者の西田は「先生」として登場し、著者とパンパンたちとの交流が手に取るようにわかる。その交わりはきわめて感動的で、立川という街に住み、女性たちを親身になって世話していたことがよくわかる。『基地の女』は、西田とパンパンとの接触の記録でもある。

しかし、本書には、西田による一方的な決めつけと思われる記述が散見されるのも事実である。西田は最初の章「女たちに彩られた街」で、「特殊女性」を一般の女性、とくに主婦と対照させて記述している。

こころみに黄昏を待って街を歩いてみるといい。買物籠をつけたスマートな自転車に乗った女たちが、肉屋で上等の肉を買い、果物店でバナナを買っている。魚屋の店先に立っている女たちは、一般の主婦たちのように、財布の中の金と相談して買う魚を決めなどはしない〔西田 1953：11〕。

主婦だけではない。特殊女性は「日本人」とも対比されている。

この街の夜の道は、夜の女たちが得意顔で道の中央を歩き、お人好しの日本人や、英語の話せない日本人が両側をこそこそと歩いている〔西田 1953：12-13〕。

米兵を相手にする女性たちは、二重の意味で特殊である。それは性を売するという行為において、結婚制度（主婦）から逸脱している。つぎに、売春あるいは恋愛の相手が日本人ではなく米兵であるという点で「日本人」から逸脱している。ほかにも西田は、女性たちの薄情さ（「他人の不幸には一片の同情も示さない」〔西田 1953：57〕）や拝金主義（「人生はすべて金である——という生き方をしていたが、こつこつ金を貯えて喜ぶ人種ではなくて、なんの思案もせず金に使えることに無上の喜びを感じる人種である」〔西田 1953：55〕）を指摘している。しかし、ここで注目したいのは、最初の章の最後でつぎのように述べていることである。

植民地的歓楽都市立川——この町では何処を歩いても女たちの姿が見られる。そして街を汚した責任は女たちにのみ負わされている。侮蔑の目が女たちに注がれる。なにが女たちを駐留兵に寄生して生きて行かなければならなくさせたのであろうか、ということはあまり考えられていないようである。むしろ一般の日本女性とは別種の人間とさえ見られて、手に負えぬ女性群は社会からほうり出された形である〔西田 1953：15-16〕。

つまり、西田は特殊女性の「特殊」性の発生の過程、差異化の過程を探る必要を強調し

ている。そして、その過程を社会的な文脈で理解しようとしている。こうした視点から西田は、女性たちが強姦や詐欺にあっても、売春婦ゆえにそれを訴えることができないと、あきらめてしまうことなどの具体的な事例をあげている。そして、つぎのような文章で本書を終えている。

国がどれほど落ちぶれて、男性の凶悪犯人が続出しても特殊男性の名称は生まれない。肉体を売ると買うとのちがいで彼女たちには、特殊女性という名称がつくられてしまっている。あたりまえだと笑われれば、それまでであるが、同じ人間に生まれながら男性と女性との立場の相異は、人間の世界に不思議なものの見方を作ってしまったものである〔西田 1953：189〕。

西田は、当時広範に使われていたであろう「特殊女性」という概念について、いまならジェンダーの視点からといって良いような批判を男性（米兵）や日本社会にたいして加えている。残念ながら、西田の問いはそれ以上深く論じるところまでは至っていない。しかし、当時、「特殊女性」という言葉で米兵相手の女性が、いわば内なる他者として理解されてきたことを考えれば、西田の問いは当時の日本社会の根源的な批判ではなかったか。

『基地の女』の価値は、このような問いかけをすることで、われわれに自己と他者との境界の曖昧さ、そしてその線引きに作用するジェンダーをめぐる権力関係にするとく迫っていることである。

『基地の女』が公刊されたのと同じ年の『婦人朝日』（1953年9月号）で「基地の紅い灯を消そう」という特集がなされている。そのなかで「夜の女をどうするか？——風紀対策の問題点と解決への方向」という座談会の記録が掲載され、そこで、西田はつぎのように述べている。

特殊婦人を更正させるといっても例えば三年か四年、外人を相手にしてると、日本人と結婚できなくなるんですね。セックスの問題も不満だし、日本人は見るのもいや、体臭がいやだというんです。黒人を相手にしていた人はまだいいんですけれども、白人を相手にしていた人はダメですね。身体が変わっちゃうんです。ですから、更正寮へ入れても、朝起きてタバコ一本すえないのが苦しいといって逃げ出したり、袋貼りの作業をさせると、それに印刷してある性的な記事を見付け出して取っておいたり、禁慾生活に堪えられないらしいんです。いくら監視しても、うまくいきませんね（45-46ページ）。

ここで西田は、性的な経験が女性たちに多大な影響を与えていると指摘している。「身体が変わっちゃう」という言葉に西田の悲観的な意見が凝縮<sup>19)</sup>している。それは、女性にたいする偏った見方を助長するような視点といえよう。女性たちは男との関係を通じて、もはや帰ることが不可能な世界へと入り込んでしまった。とくに白人男性と関係をもつと女性は性的に変化してしまうというわけだ。一旦変わってしまった女性たちを救うことは不

可能だ、ということになる。この座談会での発言は、『基地の女』においてもときに認められる、パンパンたちの否定的なイメージをそのまま受け継いでいるように思われる。

私が注目したいのは、西田の発言や著作には、パンパンへの両極的な感情が認められるということである。西田は一方で彼女たちに更正の可能性を認め、またその背後にある権力関係——男性と女性、戦勝国と敗戦国など——への批判的視点をもち、他方で彼女たちを固定的かつ悲観的にとらえている。そこには、敗戦直後の知識人男性のジレンマが透けて見える。西田は、先生として「特殊女性」たちと個別に接し、その特殊性がけっして特殊ではないことに気づく。それゆえ、更正という目的も意義あるものなのだ。かれは、更生者（＝啓蒙者あるいは救済者）<sup>20)</sup>としてみずからを位置づけ、知識人男性としての立場を確保することができた。しかし、他方で、彼女たちが米兵と関係をもち、そこから抜け出ることができないと語っている。それは、決めつけともあきらめとも解釈できるかもしれないが、そのあきらめは敗戦国の男性に特有の諦観に通じるように思われる（高見の日記[2005]を参照）。敗戦国の女性は、一部の女性を守るためという名目と生活上の必然性からパンパンとなり、男性たちはおしなべて「女性化」<sup>21)</sup>した。徹底抗戦を信条とする者はもはやなく、米軍による「解放」を楽天的に受け入れるわけにもいかない男性の視点が西田のあきらめに認められよう。だが、女性を批判したり、また女性の言葉を通じて米兵を批判したりすることで満足できる著者たちは、ある意味で幸せなのだ。

## 7 女たちのまなざし

男性との関係でパンパンたちが周縁化されていたのは明らかである。さらにいえば、売春婦たちは、当時の売春廃止を唱えていた女性たちによっても、同情されるというよりは敵視されていた。売春の原因は、あくまで当事者の愚かさにあったとされていたからだ。その背後にある貧困や米兵の暴力・性的搾取が問われることはなかったのである。以下に、廃娼運動家の代表者の一人植村環の言葉を引用しておきたい（「売笑婦のいない世界を」『婦人公論』1954年3月号、45ページ<sup>22)</sup>）。

日本のパンパンの数は数万あって、大方は積極的に外人を追いかけて歩き、ダニのように喰いついて離れぬ種類の婦人たちである。

外人の中には、淫猥な動機を以て街をウロツイている軽蔑すべき人々もあるに違いないが、同時に、初心な生息子が、海千山千の売春婦に汚される場合もあり得ることである。（中略）私たち日本婦人は日本の母であるのみならず、遍く、世界中の若人たちの母たる自覚を、この際発揮すべきだと思う。彼ら外国の青年たちは誘惑から守ってやるために、苦心し、方法を廻らす事は、当該国との親善に貢献する事ではあるまいか。

女性たちは、パンパンを擁護したり、救済したりする立場に立つことさえ拒否し、「母」



としてその撲滅を宣言している。ここに、母性と魔性（セクシュアリティ）というおなじみの対立図式を認めることはたやすい。母にとって、米兵もまた「初心な生息子」なのだ。母になることで女性たちは米兵の攻撃的なセクシュアリティを馴化しようとした。しかし、母性を強調すればするほど、性的存在としてのパンパンたちを他者化しなければならなかったのである。

同じことは、「一般女性」にも当てはまるであろう。パンパンのおかげで守られることになったはずの「娘たち」本人が彼女たちに感謝していたとは思えない。年頃の娘や幼い子供たちがいる親たちは、パンパンの存在は風紀を乱し、子供たちに悪影響を及ぼす何者でもなかったであろう。このことは、さきに触れた子供たちのパンパン観からも推察される。こう考えると、パンパンは、米兵、日本人男性、日本人女性、そして子供たちからさえ「特殊」化された周縁的存在であったのである。

しかし、例外的な共感や理解をパンパンに示していた女性もいる。以下は文野治子による「基地の女とともに」（『婦人朝日』1954年3月号、45-57ページ）からの抜粋である。ここには、パンパンたち7人の言葉が生々しく再現されている。文野は、当時20歳、1947年に中国から引き揚げ、中学を卒業後女中として働き、18歳から横須賀のバーで少女ボーイとして2年ほど働き、その後バーテンダーとなるが、ふたたび女中となる。

文野は、1953年暮れに横須賀や立川を訪れた婦人議員たちの、あまりに一方的かつ一面的な報告に腹を立てて、また「その中にうごめく人間の真実が、余りにもパンパンという言葉で片づけられ一定の型にはめこまれているのを悲しく思いました」と述べる。

文野は、まず自分が最初にバーで働きはじめたとき、「セーラーとパンパンと呼ばれる社交係が人前もはばからず接吻しながらふざけあって」いたりして、「余りに刺激が強過ぎ、恥かしさに顔も上げ得ぬほど」だった。ほかの少女ボーイたちが、甘い言葉や贈り物、あるいは映画への誘いに負けて「社交係」（バーで客を取る売春婦）に「堕ちて」しまうのを見ながら、戦死した父のことを思い出してこれらの誘惑に抵抗してきたという。5,000円の給料はすべて母に送っていた。

文野は、女中をしていたときは「世間の人並みに、けばけばしい服装で、あたりかまわずチューインガムをはき散らす彼女らに侮蔑の念を持って見てき」た。しかし、「彼女たちが、彼女たちなりに、自分の職業に批判を加え、両親に責められつつも、なお抜け切らずにもがいている」ことに驚く。

登場人物7名のうち2名を紹介しておく。まず22歳のあい子。米兵とのあいだに生まれた2歳になる子供を姉に預けて働いている。あい子は、自分の身を電車に乗りこんで花を売る少女と対比している。彼女は処女で体つきが違う。「目は生き生きと輝いて頬っぺたは真赤ではち切れ」そうだ。これにたいし、あい子は皮膚に艶はないし、「どんなにかくして堅気らしく装ってもパンちゃんはかくしきれない」。彼女は、「ひっくり返りそうな高い靴はいて、日本人のくせにラッキーストライクふかして、国へかえれば、一日牛のしりばかり眺めて暮さなきゃならないようなセーラーの腕にぶらさがってんだ、みっともないたらありゃしない。全く我ながら愛想がつきちゃうな。涙もでましようってんだ」と述べる。

花売りの少女は、一般の日本人女性を代表し、昔のあい子自身でもある。彼女は貧しいし、「何もかもが粗末で薄汚れて」いるが、もんぺが覆っている彼女の肉体は輝いている。他方、あい子は外側は（男も含め）外国品で身を固めているが、その由来は自慢できるものではない。みっともないのだ。

だが、そんなあい子も売春をやめようと思ってもやめられない。その理由はお金だけではないようだ。

外から見てればキレイな服を着て化粧して、うまい物食って、むこうのタバコ、スカスカふかしてさ。ずいぶん楽しそうに見えるけど…。ごらんの通りさ。（中略）私もこれまで二、三度、堅気の生活にもどろうと決心して家へ帰ったことがあるんだよ。でも駄目さな。恋しくなるんだ。一日レコードのじゃかじゃか鳴って、ダンスのできる生活がね。それに、男だって悲しくなるんだ。自分でも情けなくなるよ（48ページ）。

あい子が逃れることのできない「魅力」。当時なされていた多くの調査が「誘惑」といった項目にまとめている「魅力」。あい子が惹かれる世界を無視することはできない。

えい子は、裕福な家庭に育ったが、日本人の結婚に失敗し、親ともうまくいかなくなってこのバーで社交係として働く。ベース勤務の男性から結婚を迫られ、バーをやめオンリーの身となる。文野は、米兵のなかでもどちらかというところかなり薄給の男との結婚なんかうまくいかない、それよりいまは目をつむってお金をためてから手を洗うほうがいいと説得する。「[あんなのような考えは]うちみたいに親から見放されるし、世間の人からは、あれパンパンや、パンスケやて、白い眼で見られてこんな人生の裏街道流れて生きてるもんには通用せえへんの」と述べ、だれでもいいから、いまの私を好きだという人に真面目に答えたい、と反論する。ここには売春婦であるという事実を知っていてなお結婚を申し込もうとしている純情な男とその愛にこたえようとする女の美しい話に見えるが、他方で、愛を名乗ることで契約金など払わずに女を自分のオンリーにしようとする男の身勝手な話でしかないとも解釈できる。当時米兵との結婚は、その愛と同じくらい不確かだったからだ。唯一の救いは、同居にあたって、ほかの基地でタイピストとして従軍していた、男の姉がわざわざえい子に会いに来たことであろう。

文野の紹介する女たちの語りには、米軍や日本社会にたいする痛烈な批判は認められないが、それゆえによりリアルな語りとして私たちの心に訴えるものがある。

## 8 コンタクト・ゾーンと中間者

ここでは、まず本稿で取りあげたテキストがどのような役割を果たしているのかを検討し、つぎに冒頭で指摘した中間者について考察を試みたい。

パンパンをめぐるテキストは、批判的であれエロティックなものであれ、そこにはパンパンと米兵との「いやらしい」行動——嬌声、人前でのキス、手を組んで歩くといった

まなら許される行為から覗き見によるセックスまで——が描写されていた。米兵と売春婦たちとの痴態を読むことで、男性読者たちは、みずからの「正常性」を確認したであろう。いや、かれらだけではない。男性読者は、自分たちの女性——妻、姉妹、母、娘など——もまた正常であることを確認する。パンパンと異なり、まだ彼女たちは汚されていない。彼女たちは、汚されずにすんだ、墮落せずにすんだ女性なのだ。パンパンの肉体だけではない。彼女たちの物語もまた、外国人男性の圧倒的な力——敗戦国の人間への有無をいわせぬ支配、攻撃、排除、凌辱など——にたいする精神的な緩衝地帯として作用していたのである。それはまた、日本人男性による米兵の男性性を馴化する試みだったのではなかろうか。同じ日本人でありながら「他者性」を帯びた売春婦の語り——とくにエロティックな「告白」——を必要としたのである。

五十嵐恵邦は、『君の名は』を分析する文章で、戦後解放された奔放な女性のセクシュアリティは飼いならされなければならなかった、と述べている [五十嵐 2007:188]。そして、その例として、パンパンのような登場人物たちの悲惨な運命についての語りをあげている。文野が紹介する女たちの物語もこの枠を出るものではない。米兵の動物的なセクシュアリティを馴化する存在であった売春婦たちは、それゆえに同時に危険な存在として他者化され、さらに馴化あるいは排除されなければならなかった。

しかし、パンパンは完全な他者にはなれない。彼女たちはまさにみずからの物語を通じて語りはじめるからだ。そして、その語りのなかには日本社会の伝統的なジェンダー規範を批判し、米兵がもたらした新しい男女関係を肯定的にとらえる者もいた。米兵とつきあってきた女たちが皆みずからの意志に反して処女を失い、日本社会で生きていけなくなった存在というわけではない。またすべてがパンパンであったのではない。現代から見ればけっして不自然ではない形の交際期間を経て、結婚し海を渡った女性もいるからだ。いわゆる戦争花嫁をすべて「貧困のため」と説明するべきではないだろう。「ドイツ兵は6年もちこたえたが、ドイツ女性は5分しかかからなかった」[zur Nieden 2002:304]という言葉があるように、女性が勝戦国の男性や物品、そして文化に惹かれるのは不思議なことではなかった。それは、敗戦国の男性には露骨な非難であり、屈辱であった。当然彼女たちによる批判は日本の「封建的な」男女関係への批判に通じるものであった。

以上から、男性も女性も、さらには子供たちも、プラットが想定していたよりはるかに複雑な形でテキストを創出し、またみずからを位置づけようとしていたことが明らかである。本稿に登場する男性批評家、男性作家、女性たちは、コンタクト・ゾーンのなかで媒介者あるいは中間者として考察すべきであろう。本稿では言及しなかったが、ダンスホールやビアホールを経営する業者、パンパンに部屋を貸していた家主、ハウス・メイド<sup>23)</sup>や基地の労働者あるいは取り締まる側の警察官も忘れてはならない。

また一般女性による米兵たちへの態度も千差万別であった [河井 1955:147-148]。エンローは、「売春婦と兵士、国家と企業家」[エンロー 1999]と題する論文で、兵士を相手にする売春婦は不可視であるから、その声を聞かねばならない、と主張している。しかし、本稿で取りあげたパンパンたちは、不可視の状況からは程遠いところに位置していた。もちろん、そこに彼女たちの「真の声」が認められるかどうか、そもそも真の声が存在す

るのか、という問いについてはあらためて問われなければならないかもしれないが、パンパンたちはけっして不可視であったとはいえないことに注意したい。むしろ、さまざまな中間的立場から複数の——しばしば矛盾した声が、かしましく聞こえてくるという状況であった。

それでは、支配する側から一番遠いところに位置するように思われる子供自身が中間に位置することはあるのだろうか。ここで『基地の子』に紹介されていた「ある出来事」という題名の作文を紹介しておく。

親が米兵になにかを教えている先生だったために、ふたりの女子中学生が同級生の男子に米兵と一緒にいることを目撃されてしまう。そして、教室で「パンパン」と罵られて、学校に行けなくなってしまう〔清水ほか編 1953：176〕。この場合、罵る男子生徒は、米軍とは別のところ——世間——から発動する権力といえないだろうか。つまり、米軍との対比で被支配者と位置付けられる日本人のなかで、どこから見てももっとも脆弱とみなされていいはずの子供たちのあいだにさえ亀裂が入るのだ。

支配する側の極に位置する米軍のヒエラルキーを考慮するなら、パンパンを相手にしてきた米兵たちを、支配する側としてまとめるわけにはいかない。かれらもまた、軍の組織においてどちらかというと末端に位置する独身男性なのである。買う側の米兵たちも——権力者の代表というよりまた中間的な存在と考えるべきであろう。かれらは、可能態としての軍部批判者であり、（黒人兵の場合）人種差別批判者であり、さらには未来の脱走兵なのである。というのも、占領期ニッポンではときには野卑で、ときには無垢な女の買い手としてしか登場しなかった米兵たちは、その20年後、すなわちベトナム戦争時代の日本で、脱走兵として、公民権運動の活動家として、また地域住民との連帯を掲げる兵士として——つまり抵抗者として——フェンスの内側から（再度）登場することになるからである。<sup>24)</sup>

## 9 おわりに——講和条約締結後

1952年4月のサンフランシスコ講和条約発効後、日本は連合軍による占領という状態をやっと脱し、主権を回復する。そして朝鮮戦争（1950年6月25日～1953年7月27日）の後、1957年には米軍の地上部隊の多くが撤退し、それにともない日本各地にあった基地の数も減る。<sup>25)</sup> また、紹介した本や記事は、こうした状況の変化によってはじめて米軍の犯罪について公に書かれることになったものと位置づけることができよう。<sup>26)</sup> そして講和条約締結から5年後、1957年に売春防止法が制定される。同年7月から浄化運動が開始され、警察の街娼への取り締まりも強化されている。

しかしながら、売春がこれによって全面的に消滅されたわけではないし、米軍基地は規模こそ年々縮小されているが、なお存続が容認され、米兵相手の日本人女性についてのスキャンダルに事欠かない。米兵と関係する女性たちはもはや強姦の犠牲者でも、処女喪失で「墮落」した女性たちでもない。女性たちは、自分の意志で恋愛相手として、あるいはセックスでの快楽を求めて米兵とつきあいはじめるからだ。



占領期には信じられなかったことだが、1971年には円高などの影響から基地に住むアメリカ人の女性たち（女性兵士や妻）が高い円欲しさに、日本人相手に売春をするということさえ起こるのである（伊佐千尋「小遣いほしさに肉体を売る白人婦人兵たちの夜」『週刊ポスト』1978年12月22日号、「横田基地アメリカ軍人妻“金髪売春”」『週刊大衆』1979年5月10日号）。

日本は、1970年代において経済戦争に勝利し、それにともない男女関係でも「勝者」になったということになる<sup>27)</sup>。また、1980年代になると、恋愛相手に米兵、とくに黒人兵を対象とする日本人女性がマスコミを騒がす。食事代やホテル代を支払うのは彼女たちだ。「恋愛」においても事情は大きく変わったのである。そんな女性たちの生々しい生態を描いた山田詠美の『ベッドタイムアイズ』が出版されたのは1985年である<sup>28)</sup>。彼女たちは、「ぶらさがり族」とか「ブラパン」と呼ばれる。前者は背の高い黒人と手を組んであるくとぶら下がっているように見えるからで、後者はブラックあるいはブラザーのブラとパンパンの合成語である。この名称は彼女たちがみずから使いはじめたといわれている。彼女たちにとってパンパンはもはや蔑称ではなく、自己主張の核となる言葉なのだ。その変化に戦後のジェンダーやエスニシティ観の様変わりを認めることができるのはいうまでもないが、彼女たちの物語については、稿をあらためて論じることにはしたい。

#### 注

- 1) 本来なら、米軍側のテキストについても吟味が必要だが、この点については十分な調査ができていない。手元にあるのは、ベリガン [1949] や Crockett [1949:221-224], Sheldon [1965:43-45, 115-122, 236-241] くらいである。クロケットは女性である。シェルドンは、著者自身の体験が記載されているが、パンパンについて詳しいわけではない。シェルドンは、日本人の性的モラルの緩さに言及している。学術書については、アフリカ系アメリカ人の売春婦観などの考察が含まれている Okada [2008] をあげておく。
- 2) この時期を植民地として言及する論者も少なくなかった（たとえば神崎 [1953:228], 西田 [1953:13] など）。
- 3) 1953年に実施されたパンパンについての意識調査でも、米兵相手の売春婦を必要とする理由は、一般の女性に危害が及ぶからだという回答が8割を占める [労働省婦人少年局 1953:31]。藤本義一は、米兵と売春婦との関係を戦争にたとえている。「若いGIはズボンのジッパーを上げながら照れ臭そうな顔で出て来て、キャンプの裏口からすすぐ帰って行ったもんだ。この時、おれは喝采を叫んだものだ。「日本はアメリカに負けたが、日本の女はアメリカの兵隊に勝ったぞ」と」（「けったいな人たち」『週刊大衆』2002年1月21日号、86ページ）。しかし、日本が独立し、基地周辺の売春行為を大っぴらに批判することが可能になると、1952年当時の東大総長の矢内原忠雄は「その惨禍は、かの原爆の破壊力に比べても、決して劣るものではない」と卒業式の式辞で述べている [ドウス 1995:303]。なお、参考までに1949年6月に米軍の演習基地に指定された山中湖湖畔の村についての記述を紹介しておく。「京阪地方から特殊婦人、いわゆるパン族が山中へ風のように姿をあらわし始めた時、村人たちは特婦族の入ってきたのを見て、安心した。「もううちの娘に、いや村中の女たちも、これでえ安心だ。アメリカの兵隊どもだって、今度はそう前のようなこともしないだろう」と、特殊婦人入ってきたのを見て口々につぶやいた」 [作地 1953:116]。ここにも「緩衝地帯」として「パン族」をとらえようとする考え方が認められる。ほかに窪田 [1952:82] を参照。占領下のドイツについても同じような考えが認められる (Höhn [2002:137] を参照)。ただし、「貞操で命が助かるなら」という考えもなかったわけではない。「アメリカ兵が上陸してきたら、チリ紙をもって、門司の岸壁に横になっいなさい。心をきめて、アメリカ兵の言うなりに



- なるのです。一度、身をまかせると、情が移って、アメリカ兵だって、貴女を殺すようなことはしないでしょう」というような指示がどこからともなく出回った、という（『進駐軍を迎えたセックス攻防戦』『週刊現代』1960年9月4日号）。
- 4) 神奈川県では米兵進駐後10日間に1,336件の米兵による強姦事件が報告されている [Sanders 2005:87]。占領期の米兵の犯罪については週刊新潮編集部 [1983:335-358] が詳しい。
  - 5) RAA については多くの研究や記録がなされている。たとえば、見聞録についてはゲイン [1963:217-219]、高見 [2005:338] を参照。高見は8月28日の日記にこう記している。「警視庁から占領軍相手のキャバレーを準備するようにと命令が出たこと。「淫売集めもしなくてはならないのです。いやどうも」「集まらなくて大変でしょう」「それがどうもなかなか希望者が多いのです」「へーえ」。ほかに、神崎 [1953]、ドウス [1995]、真壁 [1999]、山田 [1995] や恵泉女学園大学平和文化研究所編 [2007] 所収の諸論文（奥田、早川、平井の各論文）が詳しい。茶園 [2007:22] はRAA が一般的な呼称ではなかったのではないかという疑問を呈している。
  - 6) 千歳については神崎 [1974:170-182] を参照。
  - 7) 佐世保については井口 [1952] や内田 [1990] を参照。
  - 8) 1948年の収入調査については渡邊 [1950:167-177] が詳しい。これによると東京の女性正社員の平均月収は同年9月で3,817.75円でかなり高くなっているが、売春には及ばないのは明らかである。
  - 9) その語源についてはさまざまな説がある。これについては神崎 [1974:2-16] を参照。なお、1947年に刊行された小説、『悲しき抵抗——闇の女の手記』では日本人男性相手の売春婦たちをパンパンと表現している。
  - 10) 蔑称ではあるが、当事者の女性たち自身も使っていたこともあり、本稿でもパンパンを使用する。ほかに地域によっては山パンと下パン（上野駅周辺）などという分類が認められる [神崎 1974:70]。上野についてはほかに大谷 [1948:64-78] を参照。横浜では最下層のパンパンを「ジキパン」とか「ゲソパン」と呼んだ [宮内 1952:146]。公娼制度が廃止される前は、売春婦は公娼と私娼に大きく分かれていた。その後、集娼、散娼、街娼という区分がなされる。集娼は赤線区域に、散娼はその外部にいる売春婦を指すが、どちらも組織化されている。街娼は、相対的に個人的かつ自由な売春婦である [神崎 1953:216-217]。
  - 11) ほかに神崎 [1974:216] を参照。
  - 12) ダワーは、敗戦の虚脱や絶望をいち早く脱出し、因習打破・独立独行の精神を象徴する例が、闇市とカストリ文化（注14参照）、そして米兵相手の売春婦たちであった、と指摘している [2004:136]。また、ドウスは「パンパンは、売春という最も古い女の生き方を取りながらも、親方といわれた売春業者も（少なくともその初期には）ひもも付かず、自発的な個人営業である。ある意味で、戦後の女の反逆をより感じさせる存在だった。自由の女と自らうそぶくが、彼女たちに共通していたのは人間不信の乾いたニヒリズムと生々しい戦争の傷跡であった」と述べている（「たくましく生きた占領下の日本女性たち」『週刊読売』1983年8月20-27合併号、55ページ）。彼女たちは女性だけで「姐御」が仕切る集団を作り、なわばりをめぐって争っていた [神崎 1974:119; 西田 1953:73-77; 山田 1995:147-150]。1947年には、田村泰次郎が『肉体の門』で、そんなパンパンたちの世界を描いて肯定的な「肉体」観を世に広め一大ブームとなった。ほかに石川淳の『雪のイヴ』（1947年刊行）がある。その奔放さの事例については、小説をのぞくとほとんどが批判的な文脈においてであるが、事欠かない。なおパンパンたちは性感染症の防止を目的に強制的に病院で検診を受けさせられていた。いわゆる「パンパン狩り」である。この非人道的行為の実態とその背景については茶園 [2007] が詳しい。
  - 13) 「戦争は終わった。しかしやはり「愛国」の名の下に、婦女子を駆り立てて、進駐兵御用の淫売婦にしている。無垢の処女をだまして戦線に連れ出し、淫売を強いたその残虐が、今日形を変えて特殊慰安云々となっている」 [高見 2005:427]。
  - 14) 終戦直後に発刊されたエロティックな話題を提供する雑誌を一般にカストリ雑誌という。これは、内容もお粗末ながら、仙花（泉貨）紙を使っていたため体裁が粗悪で、芋焼酎をベースにした

- 当時の密売酒、カストリ焼酎を想起させたからという説や、カストリ焼酎を飲むと3号（合）で（酔い）つぶれるからだ、といった説がある。仙花紙とは、本来はコウゾ皮を用いた手すき和紙だが、戦時中ならびに占領期の紙不足で桑皮、マニラ麻、パルプを混入した機械すきで生産された紙を意味する。判型はB5判が一般。狭義には1946年1月に公刊された『りべらる』をもって嚆矢とする『真相』や『仮面』などの読み物雑誌、狭義には同年10月に公刊されたエロティックな物語が中心の『猟奇』、ほかに『リーベ』、『ロマンス』などがある。カストリ雑誌の全盛期は1946年10月から1949年6月までだという。表現上は過激ではなかったとしても、性的刺激を求めて消費されていたならポルノグラフィーと呼んでも問題はないであろう（以上、山本〔1998〕による）。
- 15) ただし、岩国での経験として、「マリファナやLSDをすすめられて、幻覚に酔ったこともある。気がついてみたら、私は丸裸でからだじゅうに金粉を塗りつけられ、数人のアメリカ兵にとりかこまれて、もてあそばれていたというようなこともあった。それでもそれがもう、あたりまえの世界のようだったワ」という証言もある〔山田 1995:50〕。
  - 16) 時代はさらに後の1957年になるが、田中貴美子の『女の防波堤』はRAAに勤めていた女性の手記であり性的描写も多い。
  - 17) これは1958年に発表された松本清張の『黒地の絵』に描かれている黒人兵による脱走と暴行に見られる、黒人に対する「まなざし」や同じ年に発表された大江健三郎の初期作品『芽むしり 仔撃ち』における黒人像とはかなり異なるように思われる。『日本の貞操』から強姦をしたのが白人兵だったか黒人兵だったかはほとんどの場合定かではない。「黒人の性化」がそれほど問題視されていない。1980年代に黒人兵と交際する日本人女性の生態が大きく取りあげられることになるが、黒人の性的特質を強調するような風潮はかならずしも戦争直後から認められていたわけではないのである。また、日本人が黒人と関係をもつことが、白人と関係をもつことよりも問題視されていたとは思われない。この点は戦後のドイツに見られた状況とかなり異なる〔Höhn 2002:122-125〕。
  - 18) 立川については〔鈴木編 1956,1969〕が詳しい。これは祖父江孝男による調査に基づいている〔祖父江 1972〕。
  - 19) 更生の不可能さに身体をもちだすことで、女性が性体験、とくに米兵との性体験に支配されてしまうという男性側の偏見を認めることが可能かもしれない。それは、より一般的には「淫乱な女性」に救いの道はないという決定論となる〔大谷 1948:91〕
  - 20) これは、当時のキリスト教の廃娼論者たちと類似する立ち位置ともいえるかもしれない。かれらについては荒井〔2007〕を参照。さらにいえば、このような立ち位置は、「文明化の使命」を担った植民地主義者に一般的なものである。
  - 21) もっといえば、「日本全体がパンパン宿」〔大宅 1953:136〕になったといってもいいであろう。
  - 22) 植村については、荒井〔2007:159〕、藤目〔1999:334〕に指摘されている。両文献には類似の言説が含まれている。
  - 23) たとえば「悲劇のメイド・インジャパン」(『週刊読売』1953年6月28日号)を参照。
  - 24) 朝鮮戦争が激しくなると、当時脱走兵はすでに現実的な問題であったし〔原田 1994:196-203〕、また文学的作品の主題（たとえば大江健三郎の「戦いの今日」『中央公論』1958年3月号、同年に刊行された松本清張『黒地の絵』）でもあった。
  - 25) 1952年当時1,417あった米軍施設は1957年になると455に、土地は4億坪が3億坪に、建物は400万坪余が285万坪に減少している（「米地上軍の撤退」『週刊朝日』1957年7月7日号）。
  - 26) なお、占領期に出版されたカストリ雑誌にまったくといっていいほど米兵は登場しない。
  - 27) 統計上、国際結婚における男女比が逆転するのは1975年のことである〔竹下 2000〕。それまでは、日本人女性が外国人男性、とくに欧米出身の男性と結婚する数が、日本人男性が外国人女性と結婚する数を上回っていた。この数字が逆転する理由は、アジアからの女性が日本人男性と結婚する件数が増加したからである。アジアとの関係で、日本は、かつての日本にとってのアメリカの位置に達したといえよう。
  - 28) この時代の分析についてはKelski〔1996〕が詳しい。

参考文献

- 荒井英子 2007 「キリスト教界の「パンパン」言説とマグダラのマリア」 恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性——政策・実態・表象』インパクト出版会, pp. 149-178。
- 五十嵐恵邦 2007 『敗戦の記憶——身体・文化・物語1945-1970』中央公論新社。
- 井桁 碧 2005 「敗戦／占領とジェンダーのポリティクス」大越愛子・井桁碧編著『戦後・暴力・ジェンダー1 戦後思想のポリティクス』青弓社, pp. 59-109。
- 井上光晴 1952 「新軍港都市『佐世保』」高見順編『目撃者の証言』青銅社, pp. 106-122。
- 猪俣浩三・木村禧八郎・清水幾太郎編著 1953 『基地日本——うしなわれいく祖国のすがた』和光社。
- 今岡健一郎・坊柴子 1950 「特殊婦人の生活と問題」大河内一男編『戦後社会の実態分析』日本評論社, pp. 262-292。
- 内田文雄 1990 『パラダイス通りの女たち』ほたる書房。
- エンロー, シンシア 1999 「売春婦と兵士, 国家と企業家」『戦争の翌朝——ポスト冷戦時代をジェンダーで読む』(池田悦子訳) 緑風出版, pp. 157-178。
- 大谷 進 1948 『生きてゐる——上野地下道の実態』(戦後日本社会生態史 第1集) 悠人社。
- 大塚達雄 1949 「街娼誕生」竹中勝男・住谷悦治編『街娼——実態とその手記』有恒社, pp. 89-96。
- 奥田暁子 2007 「GHQの性政策——性病管理か禁欲政策か」 恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性——政策・実態・表象』インパクト出版会, pp. 13-43。
- 河井 道 1995 『スライディング・ドア』(中村妙子訳) 恵泉女学園。
- 神崎 清 1953 『夜の基地』河出書房。
- 1974 『売春——決定版・神崎レポート』現代史出版会。
- 宮内寒彌 1952 「ヨコハマの日本人町《野毛町のルポルタージュ》」高見順編『目撃者の証言』青銅社, pp. 136-155。
- 窪田 精 1952 「富士山麓(一)」高見順編『目撃者の証言』青銅社, pp. 72-87。
- 栗本英世 1999 「討伐する側とされる側——すれちがう相互認識」栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院, pp. 146-169。
- 慶応義塾大学社会事業研究会編 1953 『街娼と子どもたち』慶応義塾大学社会事業研究会(1998『日本〈子どもの歴史〉叢書24』久山社に再録)。
- 恵泉女学園大学平和文化研究所編 2007 『占領と性——政策・実態・表象』インパクト出版会。
- ゲイン, マーク 1963 『筑摩叢書12 ニッポン日記』(井本威夫訳)。
- 五島 勉 1985 『黒い春——米軍・パンパン・女たちの戦後』
- 編 1953 『続 日本の貞操』蒼樹社。
- 作地重知 1953 「爆音と嬌声のるつぼ——山梨県・山中湖基地」猪俣浩三・木村禧八郎・清水幾太郎編著『基地日本——うしなわれいく祖国のすがた』和光社, pp. 11-125。
- 佐々木隆爾 2008 『日本史リブレット101 占領・復興期の日米関係』山川出版社。
- 佐多稲子 1978 「薄曇りの秋の日」『佐多稲子全集 第五巻 みどりの並木道』講談社, pp. 289-303。
- 清水幾太郎・宮原誠一・上田庄三郎共編 1953 『基地の子 この事実をどう考えたらいいか』光文社
- 下川耿史編 2007 『性風俗史年表——昭和〔戦後〕編 1945-1989』河出書房新社。
- 週刊新潮編集部 1983 『マッカーサーの日本 上』新潮社文庫。
- 鈴木二郎 1969 『人種と偏見』紀伊國屋新書。
- 編 1956 『都市と村落の社会学的研究』世界書院。
- 住本利男 1952 『占領秘録』毎日新聞社。
- 祖父江孝男 1972 「基地“立川”の裏面を探る」朝日新聞社編『朝日講座 探検と冒険7』, pp. 92-106。
- 創価学会婦人平和委員会編 1982 『平和への願いをこめて 6 基地の街(神奈川) 編 サヨナラ・ベースの街』第三文明社。
- 高見順 2005 『敗戦日記』中公文庫。
- 竹下修子 2000 『国際結婚の社会学』学文社。

- 竹中勝男・住谷悦治編 1949 『街娼——その実態と手記』有恒社。
- 田中貴美子 1957 『女の防波堤』第二書房。
- ダワー, ジョン 2004 『敗北を抱きしめて——第二次大戦後の日本人 増補版 上』(三浦陽一・高杉忠明訳) 岩波書店。
- 茶園敏美 2007 『「パンパン」とは誰なのか——「あこがれ」と「欲望」のゆくえ』大阪大学文学研究科提出博士論文。
- 勅使河原宏 1972 「ルポルタージュ 快楽の原野・岩国の五百メートル」『潮』6月号:190-196。
- ドウス昌代 1995 (1979) 『敗者の贈物——特殊慰安施設 RAA をめぐる占領史の側面』(講談社文庫) 講談社。
- 西田稔 1953 『基地の女——特殊女性の実態』河出書房。
- 早川紀代 2007 「占領軍兵士の慰安と買売春制の再編」恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性——政策・実態・表象』インパクト出版会, pp. 45-78。
- 原田弘 1994 『MP のジープから見た占領下の東京——同乗警察官の観察記』草思社。
- 平井和子 2007 「RAA と「赤線」——熱海における展開」恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性——政策・実態・表象』インパクト出版会, pp. 79-118。
- 藤目ゆき 1999 『性の歴史学——公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版。
- 藤原道子 1955 「基地の周辺 御殿場の場合」有泉亨・團藤重光編『法学新書 1 売春』河出書房, pp. 112-122。
- ベリガン, ダレル 1949 『Off Limits ——くらやみの登場者たち』世界評論社。
- 真壁 呉 1999 (1978) 「生贄にされた七万人の娘たち」猪野健治編『東京闇市興亡史』双葉社, pp. 223-253。
- 水野浩編 1953 『日本の貞操——外国兵に犯された女性たちの手記』蒼樹社。
- モラスキー, マイク 2006 『占領の記憶 記憶の占領——戦後沖縄・日本とアメリカ』(鈴木直子訳) 青土社。
- 山田盟子 1995 『占領軍慰安婦』講談社文庫。
- 山本明 1998 『カストリ雑誌研究』中公文庫。
- 労働省婦人少年局 1953 『婦人関係資料シリーズ, 調査資料 No. 11 風紀についての世論 1953年 3 月調査 総理府国立世論調査書実施』(高橋久子・原田冴子・湯沢雍彦監修『戦後婦人労働・生活調査資料集 第23巻 生活篇〔5〕風紀・売春』クレス出版, 1999年, pp. 1-54に再録)。
- 渡邊洋二 1950 『街娼の社会学的研究』鳳弘社。

- Crockett, Lucy Herdon 1949 *Popcorn on the Ginza: An Informal Portrait of Postwar Japan*. London: Victor Gollancz Ltd.
- Höhn, Maria 2002 *GIs and Frauleins: The German-American Encounter in 1950s West Germany*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Kelski, Karen 1996 Flirting with the Foreign: Interracial Sex in Japan's "International" Age. In Rob Wilson & Wimal Dissanayake eds. *Global/Local: Cultural Production and the Transnational Imaginary*. Durham, N. C.: Duke University Press Book, pp. 173-192.
- Kovner, Sarah C. 2004 *Prostitution in Postwar Japan: Sex Workers, Servicemen, and Social Activists, 1945-1956*. Ph. D. Thesis submitted to Columbia University.
- Okada, Yasuhiro 2008 *Gendering the "Black Pacific": Race Consciousness, National Identity, and the Masculine/Feminine Empowerment among African Americans in Japan under U.S. Military Occupation, 1945-1952*. Ph. D. Thesis submitted to the Michigan State University.
- Sanders, Holly Vincele 2005 *Prostitution in Postwar Japan: Debt and Labor*. Ph. D. Thesis submitted to Princeton University.
- Sheldon, Walt 1965 *The Honorable Conquerors: The Occupation of Japan 1945-1952*. New

York: The Macmillan Company.

zur Nieden, Susanne 2002 Erotic Fraternization: The Legend of German Women's Quick Surrender. In Karen Hagemann & Stefanie Schüler-Springorum eds. *Home / Front : The Military, War and Gender in Twentieth-century Germany*. Berg: Oxford, pp. 297–310.